
ハートの国のアリス I N 桃太郎

百合花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハートの国のアリスIN桃太郎

【Nコード】

N6525N

【作者名】

百合花

【あらすじ】

ハートの国のアリスのパロディです。

一週間考えてこうなった反省はしていない。

誰とも恋愛関係にならず、なおかつ国に残った状態です。

みんながアリスを大好きです。そして、アリスの滞在地は時計塔です。

桃太郎成分は薄いです。勘弁してください。

p i x i vにも投稿していますが、中身は同じです。忘れないようにこっちにもうpしますが、利用規約には触れていないはず。

では、お楽しみくださいませ。

（前書き）

ぼちぼちまったり読んでみてください^^

改ページしていないのでしおりを有効活用してください。

一期に読むと、私は眼がヤバいことになりました。液晶っておそろしい。

がんばって読んでくださいね^^

にて――

「――紅茶の代わりはどうか？お嬢さん」

「……いただくわ」

「アーリスっ！にんじんジュースと、にんじんブリュレと……甘煮も、ケーキもあるぜ！」

「ちよつと。うるさいよ、ひよこウサギ」

「お姉さんが迷惑がっているじゃないか、馬鹿ウサギ」

いつもの他愛ない会話。エリオットと、デイーとダムの口喧嘩。それを無視してブラッドが優雅に紅茶を飲む。

ここまでは、いつもと変わらないのに。

「下等な会話ですね……アリス、城に帰りませんか？」

「わらわも早く帰りたい。いくらアリスの願いと言えど……」

「えー、もうちよつといよろよ。ペーターさん、城だとアリスにべつたりじゃないか。俺も遊びたいのにー」

「……エース君、アリスに何したんですか」

「何もされてないわよ。電波やめてちょうだい」

ああ、頭が痛い……仕方がない気もするし、逃げられないのはわかってる。

ほわりと、不意にアリスの視界に派手なピンク色が混じった。

「なあなあ……帽子屋さんとお茶して、楽しい？遊園地行って、俺と遊ばねえ？」

「どこでもいいんだが……演奏してやるぜ？なあ、アリス」

「……はあ」

ダメだ、正気が保てない。そして頭痛がひどい。何だってこんなにキヤラが濃いんだ。

濃すぎる。こんなの、あり得ない。

ぐったりと椅子にもたれ、アリスは疲れ果てたように溜息を吐いた。

——視界の端に映ったのは、怪しげな服装の隻眼の男の微笑みだった。

——数時間前——

——事の発端は、些細な夢のようなことであつた。

「うーん……こっちの部品、少し足りないわ……」

時計塔に滞在しているので、ユリウスの手伝いで時計の修理。というか、部品の仕分けなのだが。やたらと小さく種類も多く、慣れてきてもまだ戸惑ってしまう。最近はさらに仕事も増え、精神的にも肉体的にも余裕はなくなってきたてはいるのだが、それでも嬉しいことがある。

いい香り——コーヒーの香りだ。

「アリス。疲れたか？コーヒーを淹れた」

「あ……いただくわ、ごめんなさい。私が淹れようと思ったのに……」

「時間が空いたからな、自分で淹れた。お前の方が今は上手だ……悪いな」

「い、いや、いいのよ」

こっちが焦るほどににこりと笑んでくれる。会ったばかりの頃なら考えられなかった。

ユリウスからカップを受け取り、アリスは彼をじっと見つめた。

——硬直時間、約3秒。

「ユ……ユリウス……？」

「……言うな」

「その帽子……いや、えっと、帽子なのよね……」

いつもの服も、この国に来たばかりの時は妙だった。しかし、今の方が変だ。

変な帽子——昔姉さんが読んでいた、東の国の話に出てきたものだ。確か、「烏帽子」と言っただけだ。

目を丸くして、アリスはユリウスの姿を眺めた。

「ねえ、何なの？変よ？」

「……新しいルールだそうさ。よくわからん。それにお前にもルールがある」

「何それ……訳わかんない」

「アリスっ！……っ、ここは時計塔か！？」

アリスの言葉をさえぎり扉が大きく開かれた。

美しいドレスを身にまとった、紅の麗人が——

不思議そうな表情で、ビバルディはアリスの肩をつかんだ。

「……夢魔はどこじゃ。何をしてくれてくれた？」

「えっ？ナイトメア……？」

「ルールだ。——アリスが、『鬼』を倒すらしい」

コーヒーを口に含み、ユリウスはこともなげに言った。

その彼を瞬時に睨み、ビバルディは杖を構えた。

「させぬぞ。アリスにそんなことさせるか……」

「ルールだ。理解しろ」

「わーっ、わーっ！とっ、とにかく！私が何とかすればいいのよね！」

剣呑な雰囲気を感じ、アリスは慌てて二人に言った。

静かにうなづき、ユリウスが顎に手を当てた。

「童話——らしい。何だったか——」

「そのくらい知っている。あの夢魔め……桃がどうの……」

「桃？食べるのかしら……」

「知らん。肝心なところが曖昧じゃ。見つけ次第あの夢魔の首を――」

「っ！びつ、ビバルディ！わかったわ、桃を配って歩きまわるのよ！」

なんとかナイトメアのピンチを回避し、アリスはとっさに適当なことを口走った。

ふむ、とユリウスが棚を見た。

「そうだったか？お前が言うなら信じるが……」

「では、『鬼』を倒して桃を配って……訳がわからん」

「大丈夫よ、きっと。なんとかなるわ」

「しかし……」

不安なのは当然だ。大体、『鬼』なんていない。そんなものまやかした。

少し考え、アリスはにこつと笑んだ。

「とにかく、行ってみるわ。でないと、進まないでしょう？それに、ナイトメアを捕まえないと」

「危険ではないか？」

「うーん……どうかしら……」

「あの帽子屋でさえ殺さなかったんだ。大丈夫だろう」

ユリウスがそういうなら、とアリスはうなづいた。

かくして、ここに『桃太郎』が誕生したのであります。

＊

「……『鬼』、ねえ……」

塔を離れ、森を歩きながらアリスは周りを見回した。いつもと何一つ変わってはいない。

――はあと、ため息が漏れた。

「『鬼』など空想だ。いるわけがない」

「だったら……ナイトメアはどうして……」

「気まぐれだろう。最近は前にもましてよく吐血しているが」

「……死なないのかしら。おかしいわ」

「朝だろうと夜だろうと、あいつはいつだっておかしい」

忌々しいとつぶやき、ユリウスは『烏帽子』を脱いだ。

今更ながら、ビバルディは何一つ変わっていない。

あの妙な帽子——東の国の物なのだが、ぼんやりと姉さんが話してくれた物語には老夫婦がよく出てきた。例外もあるが、ほとんどがその類だった。

つまり——ビバルディは素で“おばあさ——

アリスの視線を感じ、くるとビバルディが振り返った。

「どうかしたか？何をジロジロと……」

「何でもないわ。大したことじゃないの」

「そうか？」

「ええ。……ビバルディはとても綺麗よ」

もしもビバルディがナイトメア的能力を持っていたら。

……首は胴体を離れていただろう。

ほっと胸をなでおろし、アリスが前を向くと。

「あつ……！アリス！アリスじゃないですかっ……！」

「うあつ！？ペーター……」

白兎、ペーター。ホワイト。ハートの城の宰相でありながらストーカーで電波。一番この国でぶっ飛んでいるかもしれない。

目立つ赤チエックのチョッキで向かいから歩いてきたペーターは、その姿を捕えるなりアリスに飛びついた。

「アリスアリスアリス！ああ、もう……幸せです……！」

「話してくれないかしら、ペーター。暑苦しいわ」

「照れてらっしゃるんですね……！かわいいアリス……」

ああ、やっぱり駄目か。この耳は高性能なのを忘れていた。

——ガチャン。

嫌な音が、アリスの両側で鳴った。

「……撃ち殺して、門前にさらしてくれようぞ」

「！？ビバルディ、ユリウス、落ちついて！」

「落ちついていいる。私の滞在客だ、勝手なことはさせない」

臨機応変にペーターも銃を構えた。

「……このままだとペーターは死んでしまっただろうか。抵抗して勝てるという保証はない。

呆れ顔のアリスを見て、ペーターは言った。

「こんな下等生物達といたら、あなたが汚れてしまいます。どうでしょう？一緒にお茶でも」

「ダメよ。今、用事の途中なの」

「そんなもの放っておけばいいのに……いえ、いけませんね。あなたはきつちりとしたお方だ。なので、僕も行きます」

「……嫌よ」

「ああ、そうですね。この姿では、目立ってしまったてお困りなんでしょう」

聞こえちゃいない。高性能にも程がある。

一旦アリスから離れると、ペーターはすぐにその姿を変えた。

……愛らしい、ウサギへと。

「どうですか？これならいいでしょう？」

「惑わされるでないよ、アリス。これはあのウサギじゃ」

「……いいわ。おいで」

「正気か！？」

可愛いから心を許す。『ウサギちゃん』だから。

嬉しそうにアリスに駆け寄り、ペーターはその腕に飛びついた。

「嬉しいです……あなたに呼ばれるなんて」

「調子に乗る出ないよ、ホワイト。アリス……お前は時計屋以上に

おかしい」

「いいのよ、この姿なら」

ふかふかで、かわいい。小動物なのだから。

怪訝そうな二人にかまわず、アリスはペーターを抱いて歩き始めた。

*

——ド派手ジャケット。いつかアリスの言った言葉であった。

三人（プラス一匹）は、遊園地の門の前に立っていた。

今回、道には標識が立っていた。これもルールなのだろうが、その通り進むと遊園地に着いたのだった。

きよろきよろと辺りを見回し、アリスは首をひねった。

「『鬼』……ゴースドじゃないわよね」

「仮にも侯爵だ。異変があれば気付く」

「ならば、何故ここなのじゃ？」

考えるも不明。原作も不明なのにわかるはずもない。

——そこへ、不意打ちに音が響き渡った。

ギギギギギギギギ……ギユワアアアアアアアン!!!!!!!!!!

「なっ！？何この音っ……………！」

「やかましい……………！首をはねるぞ！」

「騒音もいいところだっ……………不協和音などと言う問題ではないっ…

……………」

苦しむ三人は、耳を塞いでその音の原因を捜した。塞いでもしみ込むように聞こえてくるのだが。

中でも、ペーターが一番苦しんでいた。

「ぼっ、僕の耳が壊れますっ……………！」

「原因はあの人でしょうけどっ……………！」

動物耳と人の耳では聴力が違うので、その分威力も凄まじい。神経が壊れ、耳がもげそうになる。

平気な顔で働く従業員を捕まえて、アリスは大声で叫んだ。

「ご……ゴーランドの元へ案内なさい！止めるから！」

「は、はいっ！？わかりましたっ……！」

――。

ギユイン、ギギギギギ……！！

もはやバイオリンじゃない音を奏でる、ド派手ジャケットの男。三つ編みが揺れ、演奏は凄まじさを増していた。

メリー「ゴーランドその人の元へ駆け、アリスはその脚を思い切り蹴った。

「んなっ！？な、なんだ！？」

「ごおおおらんどおおおおお！！！！何してんのよっ！」

「アリス？それに……女王に時計屋か」

「壊滅的だな。耳が痛い……」

ケロリとした表情で、その当人は三人を眺めていた。涙目になって、ヒステリックにビバルディは叫んだ。

「こやつ首を……首をおっ……！」

「お、落ちついて、ビバルディ。悪いのはゴーランドだけ……」

「おいおい、ひどくねえか？」

「ひどいのはお前の演奏だ。もう演奏するな。今日はいつにもましておかしい」

確かにそうだ。いつもおかしくて耳が変になるが、今日は特にやばかった。脳まで破壊されるかと心配になるほど、荒れに荒れていた。

何故か嬉しそうにゴーランドはうなづいた。

「そうか、芸術ってのは心まで映しちまうもんなんだな……俺も、一流になってるってことだな」

「……ツツコまないから、演奏の理由を話して」

「ん？……それがな、あんのイカレ帽子屋つ……！」

突然怒り気味に、ゴーランドは言葉を吐いた。

少々引きつつも、アリスは尋ねた。

「ブラッド？あの人……また何かしたの？」

「俺のこと、また「メリーメリー」って……！今日という今日は許さねえつもりで、気合入れて演奏してたってわけだ」

「それが何なんだ。わらわとアリスの耳がおかしくなったらどうしてくれる。アリスに何かあつては困る」

「アリスは僕のですよ。陛下は近づきすぎです」

「あー、もう。話が脱線するから黙ってて」

頭が痛いとおつぶやいて、アリスはペーターの頭を撫でてやった。

耳はもう大丈夫らしく、ぴくぴくと動いていた。

だがアリスの気分が悪いらしく、彼女はふらふらとよろけた。

とつさに、ユリウスがアリスを支えた。

「大丈夫か？顔色が悪い」

「平気よ……ちよつと頭痛がしただけ」

「本当か？無理をするんでないよ」

「こりゃあ、悪いことしちゃったな……元氣が出るように、歌でも歌って——」

「いらないわ、間に合っているから」

なんとか氣力で保ち、アリスは笑顔を作った。

不安そうにゴーランドは言った。

「……何かあると心配だな……」

「平気だって。行かなきゃいけないし……」

「へ？どこに？」

「えーと……『鬼退治』？」

「は？鬼？このメンバーでか？つーか、鬼って何だ」

「……説明が面倒くさいわ。とにかく、鬼を退治するの」

「ユリウスは引きこもり、それに女王と鬼。いや、不安になるのは

当然だ」

弱いわけではないのだから、イケると思ったのだが。甘かったか？
だったら、とアリスはゴーランドに言った。

「一緒に来てくれる？心配なんですよ」

「おう、いいぜ。帽子屋ンとこまでな」

「……殴り込みって言うのかしら」

「へ？……とにかくあの野郎の頭をぶち抜く。帽子も気に入ってる
みたいだから……マフィアが死んだって、悲しむのはあんたくらい
なもんだろ？」

「——誰も死なないわ。屋敷に行っても」

誰も死なせない。非力な私がどうこう変えられるものじゃないけれど、死なせない。

きょとんとしてアリスを見るも、そうかと言ってゴーランドは愛想よく笑った。

*

遊園地を離れ、一行は標識通りに進んでいた。さっきと向きや場所がまた変わっていた。

そして、このままいくと。

「……城か」

「そうみたいね……ここに『鬼』？」

「僕の上司でしょうか、立派な鬼ですよ」

「首をはねるぞ、ホワイト」

いつの間にか人の姿に戻っていたペーターに杖を突きつけ、ビルディは眉をひそめた。

——刹那、庭で銃声が響いた。

「な、何っ！？」

「エース君ではないですねえ……ああ、また入りこまれましたか……」

「あの性悪ネコか。くだらん」

至って平然と。その感覚がいまだに理解できない。

真つ先に庭園の中に飛び込み、アリスは迷路と化したその庭を見回した。

と、遅れてゴーランドがその横に並んだ。

「あんたは下がってな。危険だ」

「けど、友達なのよ!？」

「いいから。あんの野郎……」

両手を口の前で構え、ゴーランドは一気に声を張り上げた。

慌てて耳をふさぎ、アリスは声の行った方向を見やった。

「ボ~~~~~~~~り~~~~~~~~す~~~~~~~~!!!!」

一帯に木霊した大声。怒っているのがその声色で分かった。

その声に反応し、あるうことが茂みからボリスはひょっこりと顔を出した。

「やつ。呼んだ？」

「……ボリス……」

安心は——できない。

しかし安心したかのように、アリスは安堵のため息を漏らした。

ゴーランドが、呆れたように彼に言った。

「『呼んだ?』じゃねえ。何してんだ」

「んー、遊び?」

ピンクのファー、ピンクの髪。ニヒルでシニカルなその笑みは、まさにチェシャ猫だった。

自分用にカスタマイズした銃をくるりと回し、ボリス「エレイは笑った。

「アリスっ、何でおっさんと居んの?」つか、後ろのって……」

「色々と訳ありなの。知らない?」

「ふうん……色々——って?」

特有の猫の瞳が輝く。獲物をいたぶるときの眼だ。

危険を感じて後ろに引くも、アリスはボリスの耳を引っ張った。

「ルールよ、新しいルール。というか、こんなところで銃振りまわして……危ないでしょ!？」

「い、痛い痛い! アリス、ひどいよ……」

「心配掛けさせないで! ほら、ゴーランドも何か言っただけだ!」

「俺は保護者か。アリスに心配かけたのは悪いが……」

「そうじゃあない。もっと他に言うべきことがあるだろう。」

苦笑して、ボリスはアリスの手をとった。

「新しいルールなら、俺も知ってるよ。面白そうじゃん?」

「え……? 面白いかしら」

「いいけどさ、なんでも。それよりも今は、逃げた方がいい」

「逃げる?」

「さて——なんでだ?」

お得意のナゾナゾか。しかし、逃げるのにそんなことやってる時間があるのか。

考え始めたアリスにボリスは言った。

「あんた、やっぱり悩んでる顔可愛いよ。けど、今日は答えをあげる」

「そんなに危ないの!？」

「ここの兵士に見つかっちゃってさ。おっさんも、逃げた方がいいよ」

そう言っただけ、ボリスは駆けだした。わき目もふらず、アリスの手をつかんだまま。

庭園を出た刹那、ガチャンとリロード音が耳元でざらついた。

「薄汚いネコの分際で、アリスに触れるんじゃない!」

「うっわ……時計屋さんに女王に宰相さんまで。アリス、何してたの?」

「……ルールでしょ。知ってるって言ったじゃない」

「あー……なるほど。へえ……そっか、大移動だね。俺も行ってい

い？」

——こうして、ボリスまで付いて来ることになった。背後からはボリスを探す声と足音。女王と宰相がいるので心配はないだろうが、離れた方がいいだろう。

いがみ合う周りを落ちつかせ、どうにかアリスは城を離れ始めた。

——嫌な予感しかしない。

このまま森の奥に入ると——ああ、ダメだ。嫌な予感しかしない。しかし、行かねばならない。私を待っていてくれる人がいるから。

*

ハートの城、時計塔、遊園地。標識通りに三つを回ったわけなのだが、どうにも引つかかる。

あのメンバーが一人も混じっていない。

かなり嫌な予感がしつつ、アリスはユリウスを見あげた。

「……かなり頭が痛いわ」

「私もだ。時計塔に戻りたい……」

ユリウスもかなりうんざりしていた。『鬼』の見当は付いているのだろう。

不意に、そこまでアリスにべったりだったペーターが耳をぴくりと反応させた。

「……音がしますね、銃撃戦でしょうか。アリス、あなたは僕が守りますね」

「はいはい……え？銃撃戦!？」

遅れて反応し、アリスは少々あわて始めた。

「どうだっていいですよ、そんなこと。僕はあなたさえいればそれ

でいいんです。銃撃戦なんてつまらない」

「見苦しいぞ、ホワイト」

「陛下には関係ありませんので。黙っていてください」

「……ペーター」

ペーターを睨みつけ、アリスは声音も低く言った。

ひくひくと、ボリスが鼻をひくつかせる。

「あー……ホントだ、血の匂い……」

「このまま行けば、あそこか……」

「……やっぱり……」

森を抜けたその先にある、開けた広大な土地。そこに建っている建物。

門が見え、アリスは自分を恨んだ。

——ブラッドIIデュプレ率いる、帽子屋ファミリーの拠点。それがもう、目の前に。

と、何かを感じ、とっさにペーターはアリスの腕を強く引いた。

「っ、何!？」

「危険です。あなたをこれ以上行かせられない」

「あははははははははっ、ペーターさん、なあにやってんの？」

爽やかな声とともに、紅いコートがアリスの目の前を横切った。ハートの城の騎士、エースが剣を手に二人の背後の茂みから出てきた。

銃を手に、ペーターは冷徹に言い放った。

「エース君。彼女もろとも、斬るつもりでしたね？」

「いやいや、そんなこと……どうだろうねえ。って、女王陛下達まで」

「わらわはお前に仕事を与えたはずだが。何をしておる」

「やだなあ、休憩中ですよ。……お、来た来た」

楽しそうに笑いながら、エースは門の方を見た。

屋敷の中から駆けてくる、二つの影。それが、エースを睨みつけた。

「来るなって言ってるのに、本っ当に学習しないんだね！」

「ひよこウサギよりひどいよ！ひよこ以下だ！」

「あなた達……」

帽子屋の門番、通称“ブラッディ・ツインズ”。見た目はかわいらしい少年たちが、巨大な斧を手にエースの向かって叫んでいた。トウイードル・デイー、ダムの双子をまじまじと見つめ、アリスは二人に駆けよった。

「血が出てる……デイー、ダム、何してたの？」

「お姉さん！？……あの馬鹿が、何回もここへ来て僕たちの休憩の邪魔ばかりするんだ」

「お姉さんは？大丈夫？」

「わあ、素直だねえ。アリスには甘いんだ？」

茶化すかのようにエースが目を細めて笑った。煽っているのは一目瞭然だった。

アリスの両腕にくつつき、二人はエースに叫ぶように言った。

「時計塔はこっちじゃない！早く行けって言ってるだろ！？」

「僕らは今から、お姉さんとお茶会するんだから！」

「あー……あ、あのね、デイー、ダム。私、今日は用事で……」

「アリス！僕というものがありません！」

「あー、ズルイ！そいつらと遊ぶんなら、俺も混ぜてくれるよなっ？」

とりあえず、話を聞け。

悪ノリするボリスに、アリスに駆けよるペーター。鬼退治以前に進めない。

わたわたと慌て、その反対に呆れているアリスに追いつちをかけるように、別の声がすぐ傍から聞こえてきた。

「……なーにやってんだよ、お前ら」

「エ、エリオット！？ちようどよかったわ、あのね、私鬼を――」

「黙っててよ、ひよこウサギ」

「僕らがお姉さんと遊ぶんだから」

うさ耳お兄さん、エリオット「マーチ。まだマシな方のこの人でさえ、話を聞いてくれない。

「はあ？門番サボつときながら、何言つてんだよ。敵も追っ払えてねえよおだし……」

「ふんっ。ウサギよりはマシさ」

「ニンジンばかりばくばくばく。朝から晩までそればかりるせーぞ、ガキども。——イラつく」

ガチャリと音を立て、エリオットはユリウスに銃を向けた。

「——よオ、時計屋。あんたが外に出るなんて珍しい」

「私だつて好きで来たわけじゃない。馬鹿の相手はごめんだ」

「アリスう……そろそろ帰りませんか？おいしいお茶を飲みましょう」

「アリス。わらわと帰ろう。実はな、新しい茶菓子を仕入れたのじや」

「お姉さんっ、お茶会するでしょ？」

「待てよガキども。先にこいつら片付けて……」

「あー、何しに来たんだっけ？主旨なんだっけ」

「よし。こうなりや、俺が演奏を——」

「しなくていい。耳がもげる」

……ダメだ、もう力オス化してきた。

いい加減耐えきれなくなってきたアリスは、ついにありったけの声を張り上げた。

「っ……いい加減に、しなさいっ！……！」

*

ゆらり……。

——時間帯が、朝から夕方へと変わった。空は雲まで朱色に染まり、ゆつたりと雲が流れていた。

カップに口をつけ、アリスは一呼吸置いた。

「……はあ」

「大丈夫か？お嬢さん。顔色が優れないが」

かつての恋人の顔が、笑みを浮かべて自分を見つめる。

帽子屋ファミリーの首領。マフィアのボス。それがこの男、ブラッド・デュプレ。

大丈夫よ、と返し、アリスは再び溜息を吐いた。

ふむ、と、ブラッドは座っている面子をじつくりと眺めた。

「——女王にオチビさんに宰相殿、時計屋に騎士殿に、うちのNo. 2、門番に——メリーまで」

「怒っちゃだめよ、ゴーランド」

「そうだぞ。怒ると……気分が悪くなる……」

既にぐったりとしている男が、アリスにそう言った。

「何よ。どうしてここにいるの」

「いいじゃないか。私も混ぜてくれ……」

夢の中にいるはずの夢魔。このハートの国で一番病弱な、頼りない人。

にこりと、薄い唇に弧を描いてナイトメアは言った。少々引きつつていたが。

「だ、誰が頼りないって……」

「あなたよ、あなた。どうしてここにいるのよ……」

「全員揃っているのだから、いいだろう……？」

「あなたは寝てなさい。吐血するんだから」

全員が揃う。つまり、いつ誰が銃撃戦を始めてもおかしくない状況だ。

この国に来てから、今一番危ない状況だ。

さつさと本題を終わらせようと、アリスはブラッドに尋ねた。

「ねえ、ブラッド。このあたりに……その……」

「……らしくないな。言葉に詰まるなんて」

「……『鬼』っているかしら……」

聞き方がまずかったか。ブラッドの部屋にもそういった類の本はなかったし、私らしくもない、子供のようなことを言っていると思われるかもしれない。

少しの間エリオットの頭部をじつと見つめ、ブラッドは口を開いた。

「——いや、知らないな。何のことだ？」

「桃を配って歩いて……悪いことをする『鬼』を倒すのがルールらしいのよ」

「は……？この夢魔の戯言か？」

「それが、詳しくなくて……」

そこまで言いかけ、アリスはたと気付いた。

すぐ隣の席でほくほくと紅茶を飲んでまったりとしていたナイトメアの襟をつかみ、アリスはそのまま強く前後に揺らし始めた。

「っ！？ぐっ……アリス……っ！？」

「答えて。桃とか鬼とか、何なの？」

「吐くっ……！血を吐くっ……！」

苦しそうにうめき、ナイトメアはガタリと立ちあがった。

じつと、視線がナイトメアに集中する。

それにますます顔を悪くし、ナイトメアはハンカチで口を覆った。

「ふ……ふふっ……『鬼』というのはね、自分の願望を叶えるのだよ。わかるかい、アリス——」

「おしゃべりは結構だ、夢魔」

ゴスツ——鈍い音が、アリスの耳にも届いた。

杖でナイトメアの腹部を突き、ブラッドは素知らぬ顔で紅茶を再び飲み始めた。

ぐたつと机に倒れ伏し、そのままナイトメアは意識を飛ばした。

「ちよつと、ブラッド！？」

「何かな、お嬢さん」

「何かなじゃないわよ！人殺し！」

「死んでないから、構わない。そうじゃないかな」

「死ぬかもしれないのよ！？この病弱で頼りにならなくて、吐血ばかりする夢魔が！」

「それは言いすぎじゃないかと思うんだが——まあ、気絶しているのなら何でもいい」

優雅に紅茶を飲むこの男——本当に人間か。

つまらなさそうに、ブラッドは言った。

「面倒ならやめてしまえ。『鬼』なんて幻想だ」

「……そう、ね……」

いい加減疲れてきたからか、頭が働かない。もういつそ、本当にやめてしまおうか。

アリスが肯定的なのを見て、ブラッドは微笑んだ。

「お茶会を楽しみなさい。皆が静かなのは珍しい」

確かに——いつもの銃撃戦が起こっていない。

安心したように笑顔を見せ、アリスは席をたった。

「お茶をいただくわ。お招き感謝するわ」

「そうか。それはよかった」

若干照れているのか、柄にもなくブラッドの頬に赤みがさしていた。

楽しい——しかし、引つかる。

ナイトメアの言葉。何が言いたかったのか……考えた方がいいのだろうか。

『鬼』は自らの願望を叶える。

つまり、今のこの世界のルールはその『鬼』によって作られているんだろう。

全員を集めてまでしたかったこと——

気持ちが悪いくらいに和やかなムードに、おいしいお茶。みんなが笑っていて（一部例外もあるが）、楽しげで平和。

『鬼』は——お茶会がしたくて——？

ふとそんなことを考えた途端、アリスの視界からあるものが消えた。

「っ……!？」

「——気付いてしまったんだね」

誰もがいなくなっていた。あの和やかなお茶会にいたメンバーが全て。

——ただ二人を残して。

「っ……ブラッド……っ!？」

「ああ——何かな、お嬢さん」

「みんなをどこにやったの!？どうして、私とあなたしかいないのよ!」

「答えるわけにはいかない。もう、君は答えを見つけている」

わからない——ブラッドが怖い。いつにもまして、不穏だ。

静かに立ち上がり、ブラッドは杖をアリスへと向けた。

「お嬢さん、私はな——君と二人でさえいれば、後はどうでもよかった。誰がおらずとも、誰がいようとしても」

「説明をして頂戴。今まで、こんなことはなかったでしょう!？」

「そうだな。しかし、あるわけがないんだよ」

「っ、どうして!」

「……この世界はハートの国ではない。つまり、ルールも違う。全員いるのは、私のせいでもあるだろう」

「どうということなの!？あなたは……っ——一体何をしたの!」

「ずず——ブラッドが紅茶をすすった。」

そしてその刹那として彼が微笑んだ——

息をもつかせぬその瞬間に、アリスの見ていた景色は姿を変えた。普段誰にも見せない薔薇の園。それが、アリスとブラッドを取り囲むように咲き誇っていた。

「え……っ？」

「私の望んだことだから、臆するな。君だって薔薇は好きだろう？」

「けどっ……こんなの……」

「愛する女性と二人きりでいたいと思うのは、男の性質だ。諦めてくれ」

「馬鹿なこと言わないで！……あなたが『鬼』なのね」

「——そうだよ。私が、君の探していた『鬼』という役だ」

にこりと笑み、ブラッドはアリスに紅茶を勧めた。

向けられた杖の先を見つめ、アリスは言った。

「——私を殺すつもり？」

「つまらないものは消す。これが、私の信条^{ルール}だ」

「ああ、知ってるわ。だから——私も殺される可能性がある」

「よくわかってるじゃないか。さすがはお嬢さんだ」

「そう？けど——私だってやすやす殺されたりなんてしないから」

殺されること前提で話が進んでいるが、私は生きたい。死にたくなんてないし、ブラッドを殺すつもりもない。

カップを机の上に置き、ブラッドはステッキを振りあげた。

「——私だけの物になってくれればいいのに」

「……それはダメよ。私は、みんな好きだもの」

「その言葉——本当かい？」

不意に、アリスの肩を背後から誰かが掴んだ。

振り向きざまに、一瞬赤いものがアリスの眼前を過ぎた。

「……ナイトメア！？」

「ゲフッ……ああ、気分が悪い……」

相変わらずの吐血率だが、それでも安心する。この空間に二人きりは怖すぎるから。

にこりと汗ばみつつも顔色悪く微笑み、ナイトメアはブラッドに向かった。

「やあ、帽子屋。さっきはよくも小突いてくれたな」

「それがどうした。この世界——バラされたくはなかったからな」

「バラす、か。私だってわからない世界だ。どうしようと勝手だが——」
「そこまで言い、ナイトメアはアリスをブラッドとは反対の方向へと強く押した。

想像以上の力によるけ、アリスはブラッドとかなり間を開けた。
剣呑に、ブラッドの眉がひそめられた。

「……何の真似だ」

「みんな、アリスを愛しているんだよ。この世界で永遠に二人きり——【今】をずっと続けようなんて、そんな理不尽なゲームは許されない」

「それでも——彼女は返してもらっ」

ガシャリ。不協和音に、銃が二人の手に構えられていた。

呆然としているアリスの手を不意に誰かが掴んだ。

「帰りますよ、アリス。元の世界へ」

「え——？」

ペーター——けど、どうして——？

薔薇園を掻きわけ、どこまでもどこまでも。連れてこられた時のように、どこへ行くのかわからない不安感が胸を騒がせる。

背後で発砲音がする。何発も何発も——けど、それも次第に遠ざかってしまった。

走り続けながら、ペーターは言った。

「みんな、何もかも知っていましたよ。腹ただしいことですが、茶番に付き合っていたということになります」

「え……けど、どうして……あんなのありえないじゃない」

みんな仲良く。そんなことありえない。あり得るはずがない。
前を向いて走り続けながら、ペーターは静かに笑った。

「——あなたが最近、あまり笑わなかったから。疲れ切っていたのを見抜かれていたんですよ、あなた」

「っ……私……？」

「そうです。仕事を詰めすぎて、誰にもしばらく会えていなかった

でしょう。まあ……時計屋への嫉妬の念も大きいですがっ」

確かに、言われてみればそうかもしれない。ユリウスがあまりにも忙しうなので、ついつい詰め込みすぎた。力になれるならそれでもいいと、そう思っていたのが他の人に心配をかけたらしい。

茨のツタを引きちぎり、ペーターはアリスの手を決して離そうとはしなかった。

「この世界は、楽しんでいただけましたか？」

「……そうね。ありもしないお茶会なのに、それまでの過程はいつも通り。みんなが自由に気ままで、ナイトメアは私を楽しませようとこの世界を用意した」

「……そういうことでいいですよ。あなたが楽しめたのなら、それだけで十分です」

まだ裏が——？けれど、酸欠で頭が働かない。

走って走って走って——そして、二人はついに薔薇園を出た。

「つ~~~~~~~~!!？」

「さあ、楽しい落下の時間です！」

来た時と同じ。どうしてここにも同じ穴があるのか。

嫌だ、これは本当に嫌いなのだ。穴に落ちることと遊園地のジェットコースターは一緒ではないのだから、嫌いに決まっている。

楽しそうに穴に飛び込んだペーターに次々と耳元で悲鳴を聞かせ、アリスはそのまま穴の底の闇へとまっさかさまに落ちて行った。

*

「——創られた世界、ねえ」

銃を片手に、ナイトメアがくすりと笑んだ。

疲れたように、ブラッドはテーブルの上に銃を置いた。

「……夢魔であれども、世界など創ることは不可能だ。わかっているだろう」

「ああ、知っているさ。私だってルールに縛られている。世界をも

しも創ることができるのなら、私はゲームのない世界を望むだろう」
「なら——今のこの世界は何だ。私の願いが実現に近付いた。いや、実現した——そんな世界は、夢でも笑えない」

「——世界に気に入られたんだろう、アリスは。そのアリスを笑顔にしてあげたいという願い——それを君が願ったから、世界は君に味方したんだろう」

「……くだらん気まぐれだな」

くだらない。本当に、くだらなさすぎる。

しかし、彼女は笑ってくれた。茶番のような世界でも、お茶会にまで来てくれて——

自分の好きな人が自分に会いに来てくれて笑ってくれた。それだけで——

それだけで——私は満足だ。

*

鍵の掛かっている扉が、音も立てずに開いた。

深々と更けていく夜の時間帯。珍しく、今日だけは時間通りに過ぎていた。

音もせず、何も起こらない。

なぜならば、夢の中にいる夢魔でさえもが『夢』を見ているのだから。

「アリス。入るぞ」

一足先に起きたユリウスが、眠い目をこすりながら作業部屋に戻ってきた。

机の上に散乱している時計の部品。普段からあれだけ大切にしろと言っているのに、今日は珍しく散らかっている。

らしくないなと呟き、ユリウスはふわりと毛布を広げた。

「……風邪をひくぞ。私は、お前の看病などごめんだからな」

答えなんて必要ない。風邪なんて引かれたら、それこそ作業が手に付かない。

机の上に腕を枕代わりにして乗せ、その上に頭をのせて眠っている少女。いつもよりも幼く見えたその表情には、薄く笑みが浮かんでいた。

そつとアリスの頭を撫で、ユリウスは毛布をアリスの肩にかけた。進むことも戻ることもない時間。その永劫の中で、つまらない毎日を過ごす。

『アリス』という存在がいたからこそ、自分たちは意味を取り戻し、本来の自分を見られたような気になれたのだ。

『アリス』——その存在は、私達にとっては警戒を消してしまう存在であると言っても過言ではない。

「——本当の『鬼』は、お前かも知れんな——」

集団で一斉に眠った異常事態。しかし、いつになく平和で——こんな日は、アリスが来る前まで一度もなかっただろう。

すっかり冷めてしまったコーヒーのカップに口をつけ、ユリウスは彼女の彼女らしい笑顔を見つめていた。

ささやかな幸せを受けるように、夜の静寂を壊さないように――

（後書き）

ここまで読めたあなたは勇者だ！w

アリス好きだあゝ・・・あの子の可愛さは異常。あんな子が友達に
いたらきつと楽しいですよねw
エリオが攻略キャラの中では一番好きなんですが・・・あまり出せ
なかったぜorz

またこんなの掛ける機会があれば書きたいと思います。
感想等、お寄せ下さい^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6525n/>

ハートの国のアリス IN 桃太郎

2010年10月8日13時46分発行